

2019. 3. 10. 受難節第1礼拝式説教

聖書：マタイによる福音書4章1-11節

『サタンよ、退け』

先週の水曜日は、教会の暦では灰の水曜日といって、この日からキリストの十字架への歩みを心に覚えて過ごすとき、受難節のときが始まりました。今朝は受難節の最初の主の日です。古来教会では教会暦に合わせて、この聖書の個所に聞きましょう、という聖書日課というものがあります。先ほど朗読された聖書個所は受難節第1主日に読むよう指定された聖書個所です。この聖書個所は主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた直後の個所で、悪魔の誘惑を受けるため、霊によって荒野に連れていかれた、という個所です。主イエスが誘惑を受ける箇所なのです。

誘惑という言葉は、惑いに誘うと日本語では書きます。辞書を引くと「よくないことに相手を誘い込むこと」「本来の意図に反する方向に誘い込むこと」とか、「相手の心を惑わせて、悪い道に誘い込むこと」とあります。

聖書には誘惑に関する話は多々あるのですが、それらは一般的な意味での誘惑ではなく、一つのことに集約されていく誘惑なのです。それは人を神から離れさせようとする誘惑です。人を神さまとの関係から逸らしていく、神さまぬきで生きるよう人を誘い込んでいく、そういう誘惑です。

いよいよこれから主イエスの公の生涯が始まるという時に、まず悪魔の誘惑を受けた、それも霊に導かれて、というのです。霊に導かれて、ということは神の意志として、ということです。どうして誘惑を主イエスが受けなければならないのでしょうか。しかもそれが神の意志であったというのです。それは、主イエスはわたしたちが繰り返し受ける誘惑の中に、ご自身も身を置かれた、ということです。神の独り子が受肉して、この世を生きられるということは、まさに誘惑の中に身を置かれるということなのです。わたしたちはしばしば誘惑を誘惑として感じないで、通り過ぎていく。通り過ぎていくというのではなくて、完膚なきまでに誘惑に翻弄されて、受けたことも負けたことも気づかない、ということもしばしばなのです。

しかしキリストは誘惑を誘惑として受け止め、その中に身を置き、尚、誘惑を退けられた。それはわたしたちに誘惑とは何であり、それに打ち勝つ道を指し示すものだったのです。

主イエスはここで悪魔から三つの誘惑を受けられる。

一つ目。荒野で40日間断食し空腹を極めておられる主イエスに誘惑する者は、

神の子なら、これらの石がパンになるよう命じたらどうだ、と誘ってきました。ぎりぎりのところ、人にとって大事なものはパンだろ。お金だろ。生きていくうえで、本当に必要大事なものは、神なんかじゃない。パンだ。それを出してみろ、と悪魔はささやいたのです。それはあえて言えば、神さま抜きで、生きていいじゃないか、生きれるじゃないか、という誘いです。この悪魔の言葉に対して、人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる、そうキリストは旧約聖書の言葉で応えた。神のまことに支えられ、神に愛されているその恵みの中で、人はパンを食べ、日々の生活をして生きるのだ、とキリストは応えられた。

二つ目。神殿の屋根の上に主イエスを立たせ、神の子なら飛び降りたらどうだ、そう悪魔は語りかける。この誘惑は奇跡の奴隷になる誘惑とっていい。もう少し別のいい方をすれば、これこれのことが起こったら信じる、ということです。自分の病気が治ったら、神さまの働きを信じる。仕事があまくいったら神さまを信じる。これは神と取引をするような生き方であり、神を試す生き方であり、結局自分にとって都合のいい何かが起きれば信じる、奇跡の奴隷となる誘惑なのです。

キリストは神である主を試みてはならない、とやはり聖書の言葉をもって誘惑の言葉を退けるのです。

三つ目。悪魔は主イエスを高い山の上に連れて行き、この世の繁栄ぶりを見せ、「もしひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう。」と語りかけるのです。

この世の繁栄ぶりを見せて、悪魔である自分を拝め、といったのです。この世は言うまでもなく悪魔のものではないはずですが。しかし悪魔がこう言ったのは、それほどまでにこの世は、悪魔の力の支配に絡み取られている、ということです。悪魔の最大最深の願いは、人間を神から切り離すこと、神と切断することです。この場合、悪魔を拝むということは、この世を拝むということです。この世は人間を神から切り離すものに満ち満ちている。パンを拝む人がいる。お金を拝む人がいる。そして何よりも自分たちの力を信じ、自分たちの能力を過信し、神なしでこの世界はやっていけるし、やっていくのだ、と思いがっている人がいる。つまり自分を拝んでいる人がいるのです。悪魔にとって、神を拝まなければ、お金を拝もうが、自分を拝もうが、何でもいいのです。なぜならそれが悪魔を拝むことにつながっていくからです。

この悪魔の言葉にキリストは、「サタンよ、退け」といい、あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」と応えたのです。

悪魔の三つの誘惑はよく考えると、自分の中にあるものです。人が生きるうえで最

最終的に大事なことは信仰なんかじゃない。もっと別なものだという声。自分にとって都合のいいことをしてくれる神なら信じてもいい、という声。自分の力や持てるものでやっていけばいいし、それでいいのだとする声。みんな自分の中に潜んでいる声です。悪魔は、わたしたちを誘惑するのですが、もともとわたしたちの内にあるものを引き出そうとするそういう働きをします。ないものを外から持ってくるというのはない。アダムとイブのあの話もそうなのです。

この悪魔の誘惑に対して、キリストは「サタンよ、退け」といいました。もう一箇所、このマタイ福音書の中でキリストが同じことを言われる場面があるのです。それは弟子のペトロに対してでした。キリストが十字架に向かっていくことを弟子たちに語った時、ペトロはイエスをわきに引き寄せ、諫め始め、とんでもないことです、そんなことがあってはなりませんといった。それに対して主イエスは「サタン、引き下がれ」と言われたのです。

ペトロのことをずばりサタンと呼んだのは、ペトロの中のサタンを主はご覧になったからです。人間を神から遠ざけるもの、切断させるものの働きを見て取ったからでしょう。十字架がもしなければ、人間は神から遠ざかってしまうのですから。人間が神からの罪の赦しといのちを受けるためには、十字架はどうしても必要なものでした。十字架は、神とキリストの愛の結実でした。十字架は許しを受け、復活のいのちをわたしたちに与えるために避けて通れないものでした。ペトロはそれを諫めた。そんな十字架の苦しみなんかとんでもないことです、と言って十字架への道に立ちほだかった。もちろんペトロはこのとき、十字架の意味などまだ分からなかったでしょう。しかしキリストの思いより自分の思いを優先した、ということはまちがいがなく、それこそがまさにサタンの誘惑そのものだったのです。そしてここでの悪魔の三つの誘惑は、キリストの十字架をどうでもいいものにしようとする誘惑だということに気づいていくのです。

受難節の第1主日にこの聖書箇所を読む、それはどうしてなのか。

それはまさに悪魔の誘惑が十字架の前に立ちほだかるもの、十字架があってもなくてもどうでもいいものにしようとする誘惑だということ、そのことと深く関係している。わたしたちは誘惑の中に身を置いている存在であり、わたしの中にも誘惑へと向かう何かがあるのです。そしてよい道から外れ、悪い道へ行こうとする自分が絶えずいるのです。多くの場合、誘惑と対決するというよりも、気がついたらサタンに打ち負かされていた、というのが実態です。つまり誘惑されている自覚がない、ということです。神からわたしを切り離そうとする誘惑。神と関係なく生きさせようとする誘惑。自分の

力で何とかやっつけていけばいい、と思い込ませる誘惑。自覚がないままに、過ぎていくことも少なくないのです。だが悪魔はさらに一歩歩みを進ませ、踏み込んで、十字架を曖昧にさせ、十字架をあってもなくてもどうでもいいものにしようとする。悪魔の本領発揮。ここがぐらつけば、神とわたしたちは分断されるのですから。キリストはご自身誘惑の中に身を置き、誘惑と戦いながら十字架に向かっていかれた。その際、キリストはわたしたちに誘惑に打ち勝て、と言われたい。なぜなら私たちが誘惑に負けることは重々承知しておられたから。ペトロが誘惑に負けて、キリストを裏切ることも、ほかの弟子たちも皆逃げ去っていくも知っておられた。だからキリストは打ち勝つのではなく、わたしがあなたのために祈っていることを覚えておきなさい、と言われた。目を覚ましていなさい、と言われた。何に対して目を覚ましているかと言えば、キリストがご自身誘惑を受けつつ、なお十字架に向かって歩み、あなたのために祈っていること、そのことに目を覚ましていなさい、と言われた。わたしたちが自力で誘惑に打ち勝つことなどできないのです。十字架によって背負われていることを信じる信仰こそ、悪魔の最も嫌うものなのです。

D a t a : 受難節第1主日礼拝説教

讃美 : 前297、後530

新生教会礼拝堂